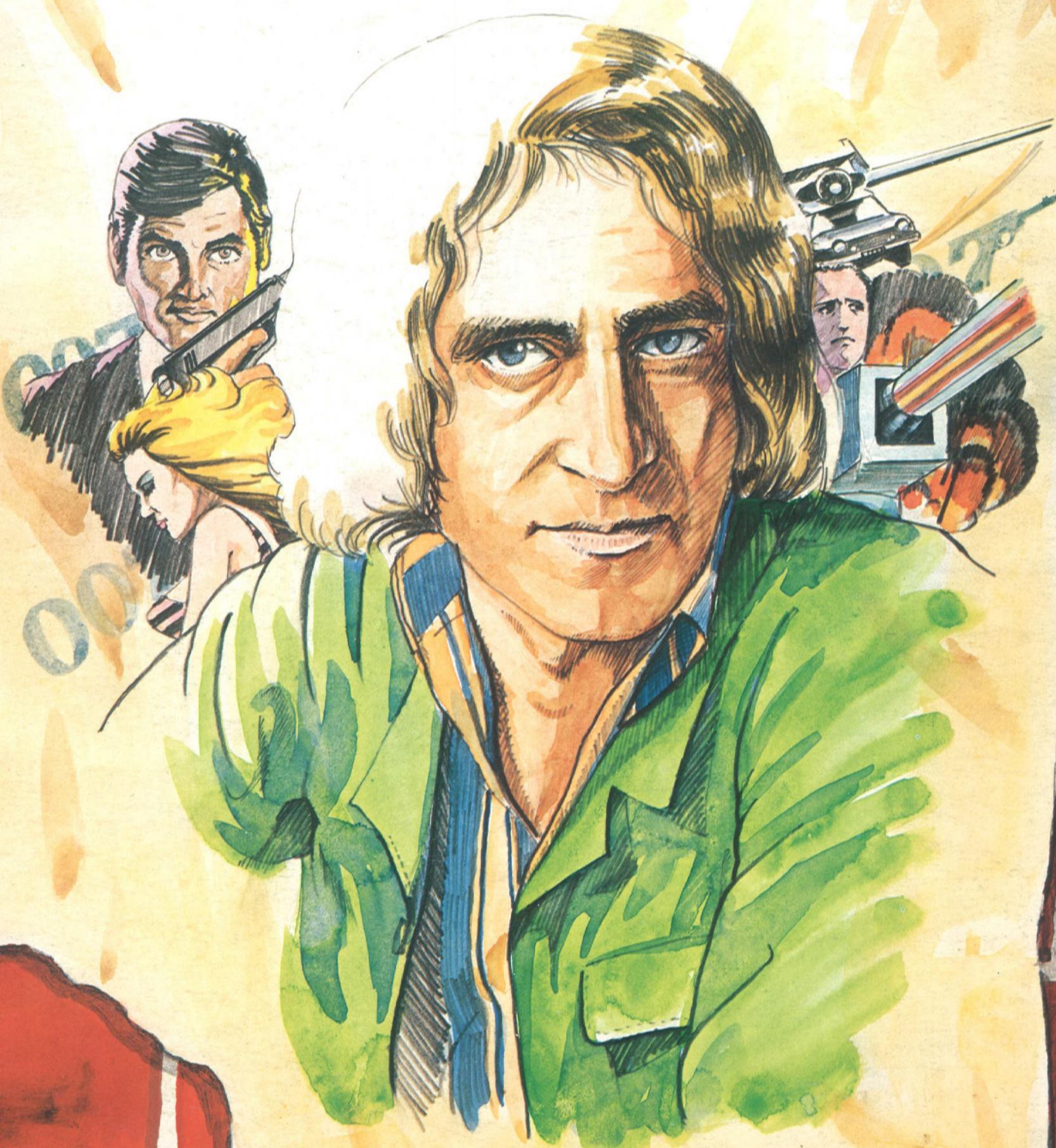


JOHN BARRY

GRAND ORCHESTRA



007/ ON HER MAJESTY'S
SECRET SERVICE
THE LAST VALLEY

MURPHY'S WAR
MONTY WALSH

WALKABOUT
007/ DIAMONDS ARE FOREVER

MARY, QUEEN OF SCOT

FOLLOW ME
007/ THE MAN WITH

THE CHASE
THE KILLER MEMORANDUM
THE KNACK

007/ THUNDERBALL
BORN FREE
THE APPOINTMENT

THE PRESS FILE
KING RAT

BEAT GIRL
THE PUMPKIN EATER
MIDNIGHT COWBOY

007/ FROM RUSSIA WITH LOVE
MAN IN THE MIDDLE
THE LION IN WINTER

2010
007/ GOLDFINGER
007/ YOU ONLY LIVE TWICE DEATH
-FALL-

JOHN BARRY TOUR-JAPAN 1975.

- 1月5日(日) 6:30 p.m. 東京厚生年金会館
6日(月) 6:30 p.m. 東京厚生年金会館
7日(火) 6:30 p.m. 名古屋市会館
8日(水) 7:00 p.m. 京都会館第1ホール
9日(木) 6:30 p.m. 広島郵便貯金ホール
10日(金) 7:00 p.m. 和歌山県民文化会館
11日(土) 7:00 p.m. 大阪厚生年金会館
12日(日) 2:00 p.m. 大阪厚生年金会館
12日(日) 6:00 p.m. 大阪厚生年金会館
13日(月) 6:30 p.m. 高松市民会館
14日(火) 6:30 p.m. 松山市民会館
15日(水) 7:00 p.m. 福岡市民会館
17日(金) 7:00 p.m. 佐世保市民会館
18日(土) 7:00 p.m. 長崎市公会堂
19日(日) 7:00 p.m. 大分文化会館
20日(月) 7:00 p.m. 宮崎市民会館
21日(火) 7:00 p.m. 鹿児島県文化センター
22日(水) 7:00 p.m. 熊本市民会館
23日(木) 7:00 p.m. 小倉市民会館
24日(金) 6:30 p.m. 神戸文化ホール
26日(日) 2:00 p.m. 千葉県文化会館
27日(月) 6:30 p.m. 中野サンプラザホール
28日(火) 6:30 p.m. 大宮市民会館
29日(水) 6:30 p.m. 群馬音楽センター
30日(木) 6:30 p.m. 平市民会館
31日(金) 6:30 p.m. 宮城県民会館
2月2日(日) 6:30 p.m. 北海道厚生年金会館
3日(月) 6:30 p.m. 釧路厚生年金体育館

プログラム監修：日野康一

写真提供：日本ユニオンアーティスト映画会社/コロムビア映画会社/20世紀フォックス(神楽)映画会社/エフ・ビスタ株式会社/東京第1フィルム株式会社/東和株式会社/シネマ・インターナショナル・コーポレーション (順不同)

主催／財団法人 民主音楽協会

読売新聞社 (東京・大阪公演)

後援／中日新聞社 (名古屋公演)

FM大阪 (大阪公演)

四国新聞社 (高松公演)

愛媛新聞社 (松山公演)

NBC長崎放送 (佐世保・長崎公演)

KTNテレビ長崎 (佐世保・長崎公演)

長崎新聞 (佐世保・長崎公演)

MRT宮崎放送 (宮崎公演)

宮崎日日新聞社 (宮崎公演)

河北新報社 (東北公演)

英国大使館





It gives me great pleasure to recommend to music-lovers in Japan one of Britain's most famous composers of music specially written for films and television, Mr John Barry. Possibly best known in Japan for his theme music for several of the James Bond films, Mr Barry also composed the music for many films which were great popular success here, such as Mary Queen of Scots, Borm Free, and Midnight Cowboy, winning Academy awards for all of these. He is well-known as an orchestral conductor both in Britain and in the United States, while his musical Billy is now the biggest box-office success in London's theatre history.

He comes to Japan with a specially formed orchestra made up of some of Britain's major instrumentalists. His audiences can look forward to hearing some of the most original and exciting popular music to be heard today.

R.A.H. Duke
Cultural Counsellor
British Embassy
Tokyo

Representative
The British Council
Japan

日本の音楽愛好家の皆様に、映画やテレビの音楽において特に英国で有名な作曲家の一人であるジョン・バリー氏を推薦申し上げることは私にとって大きな喜びであります。

ジェームス・ボンドの映画に出てくる彼の作曲したテーマで、恐らくは日本でも良く知られているバリー氏は数多くの映画音楽を作り、それは幅広い成功を収めています。

例えば「クイーン・メリー／愛と悲しみの生涯」「野生のエルザ」「真夜中のカーボーイ」などは全てアカデミー賞を受けました。

彼は英国や米国でオーケストラ指揮者として知られていますが、彼のミュージカル「うそつきピリー」はロンドンの劇場史においても大入満員の成功を記録しています。

今度、彼は英国の演奏家で特別編成されたオーケストラと来日致しますので、愛好家の皆様も最もオリジナルですばらしい音楽が聞けることを御期待下さい。

英国大使館文化参事官
ブリテッシュ・カウンシル日本代表
R.A.H. デューク

ジョン・バリ―の 苦難と栄光の歴史!

1933年11月3日、イギリス中部のヨーク市に生まれた。イギリス最古の学校といわれるセント・ピーターズ・スクールに学び、卒業後ヨーク大聖堂の音楽長フランシス・ジャクソン師に音楽の個人教授を受けた。その前、9歳のころからピアノをはじめており、学校の一般科目よりも音楽に熱を入れていた。

父はヨーク地方に映画館のチェーンをもつ経営者。幼い時から浴びるように映画を見て、16歳のとき映写技術者の免許をとり、父の映画館で働いた。同時にビル・ルッツの通信教育で、和声学、管弦楽法を学び、徴兵で陸軍に入っている間もつづけた。陸軍には18か月いて、エジプトやキプロス島にいたが、有名な「グリーン・ハブ・ズ」軍楽連隊に所属、トランペットを吹き、アレンジャーもつとめた。

1958年、除隊とともに軍楽隊の仲間3人と、ヨークのダンス・バンドの連中3人で「ジョン・バリ―・セブン」を結成、ロンドンのソーホー・スクエア（イタリア人、フランス人のレストランが多く、ビートルズの巣）にたわろしながら、ジャズメンたちとジャム・セッションをはじめ、ある音楽学校にかよった。

音楽学校では、バッハの小品をみごとにモダン曲に編曲して先生をアツといわせたが、学校そのものが性にあわぬらしく、出席常ならず、間もなく退学して、なおさらソ・ホー生活にのめりこんだ。

そのころの仲間に、7つ年下のアダム・フェイスという若者がいた。パインウッド撮影所の編集室を振り出しに、ピ・コンスフィールド撮影所のアシスタント編集者になったが、とにかく歌がうまい。ピ・ト大流行の彼にのってテレビで成功した。そのバックにいたのがバリ―で、彼の音楽監督になってともにEMIレコードに入社、たちまちヒットを飛ばし、アダム・フェイスの名はヤングのアイドルになった。

やがてアダム・フェイスが映画に出ることとなり、レコードを手がけてきた関係からバリ―が音楽を担当することになった。これが「狂っちゃいねえぜ」である。こうして、幼い頃から関係が深かった映画の仕事に首をつっこんだ。

映画音楽家ジョン・バリ―に転機をもたらしたのは、俳優・脚本家・監督・プロデューサーとして、イギリス「ニュー・シネマ」原動力のひとりになったブライアン・フォースである。彼の「L型の部屋」という日本未公開作品に、ナイトクラブでジャズ・バンドが演奏するシーンがあり、バリ―はみずから作曲、編曲、演奏をやったのけ、顔も出した。

これが、やはり「ニュー・シネマ」のプロデューサー、ハリ―・サルツマンの目にとまった。サルツマンは、アルバート・R・プロ

ッコリと共同で、イアン・フレミングから彼のジェームズ・ボンド・シリーズ映画化権を手に入れたばかりで、第1作「007/ドクター・ノオ」の音楽を、映画音楽のカラをブチ破るモダンなものにしようと考え、若い音楽家たちを物色していた。「007/ドクター・ノオ」と「007/ロシアより愛をこめて」では、「ジェームズ・ボンドのテーマ」(モンティ・ノーマン作曲)とヒット主題歌「ロシアより愛をこめて」(ライオネル・バート作詞・作曲)をのぞいて、劇音楽の作曲、編曲、およびレコーディング全般を担当した。

ボンド・シリーズは、ポール・マッカートニーとジョージ・マーティンが受けもった「007/死ぬのは奴らだ」と、サルツマン・プロッコリ・コンビではない「007カジノ・ロワイヤル」を除き、全作を手がけている。ボンド・シリーズの音楽面の基礎をきづいたのはジョン・バリ―のバリ―・サウンドであり、バリ―なくしてボンド・シリーズはやはり考えられないのであろう。

ボンド・シリーズばかりでなく、ブライアン・フォース、サルツマン、カール・フォアマンなど「ニュー・シネマ」や重流プロデューサーのトップ作品を手がけており、「野生のエルザ」ではアカデミー作曲および主題歌賞、「冬のライオン」では作曲賞と3つのオスカーを受けているのをはじめ、「007/ゴールドフィンガー」「007/ダイヤモンドは永遠に」「真夜中のカーボーイ」などで受けた数々の賞が、彼の家にずらりとならんでいる。

映画いがいでも、テレビはシリーズや単発もの、舞台では3つのミュージカルを発表、「ロリータ」は期待外れの成績に終わったが、1974年5月に初演された「うそつきピリー」は、おそらくロンドン・ミュージカルの最高記録を樹立することであろう。コンサートではロンドンのアルバート・ホールでロイヤル・フィル、ハリウッド・ボウルではロサンゼルス・フィルを指揮して自作を演奏して評判高く、こんどはイキが合った連中ばかりでメンバーを組み、世界ではじめてのジョン・バリ―・オーケストラ公演を、28日間も日本全国で開くことになった。

私生活の面でも話題の多い人で、なかでも有名なのは、1964年にトップ・モデルでのち女優になったジェーン・パーキンと結婚したら、彼女は生後3か月の赤ん坊をバリ―のもとに残してセルジュ・ゲンズブールへ走ったこと。この2人は、あのスキヤングラスなデュエット「ジュ・チーム」を、離婚さわぎの最中に発表して物議をかました。

最新作はジョン・シュレジンジャー監督、カレン・ブラック、バージュス・メレディス主演の「イナゴの日」で、来日直前に完成したはずである。

★クイーン・メリー/愛と恋の生涯

★狂っちゃいねえぜ

★マーフィの戦い

★美しき冒険旅行





JOHN BARRY-FILMOGRAPHY

〈原名は日本未公開作品〉

- 1958 狂っちゃいねえぜ
- 1959 喰いついたら放すな
Mix Me a Person
- 1960 桃色株式会社
- 1962 The L-Shaped Room
007/ドクター・ノオ(殺しの番号)
- 1963 007/ロシアより愛をこめて(危機一発)
銃殺指令
ズール戦争
- 1964 007/ゴールドフィンガー
Soance in a Wet Afternoon
4 in the Morning
- 1965 ナック
国際諜報局
キング・ラット
野生のエルザ
ジャングル・モーゼ
007/サンダーボール作戦
- 1966 The Whisperers
逃亡地帯
The Wrong Box
さらばベルリンの灯
Dutchman
- 1967 007は二度死ぬ
- 1968 華やかな情事
Deadfall
冬のライオン
タナギ
- 1969 約束
真夜中のカーボーイ
女王陛下の007
- 1970 モンテ・ウォルシュ
- 1971 最後の谷
美しき冒険旅行
007/ダイヤモンドは永遠に
マーフィの戦い
They might be Giants
クイーン・メリー/愛と悲しみの生涯
- 1972 フォロー・ミー
Alice's Adventures in
Wonderland
- 1973 人形の家
The Tamarind Seed
- 1974 The Dove
The Glass Menagerie (TV)
007/黄金銃を持つ男
Love among the Ruins
The Day of the Locust

(British Film & TV Yearbook ほかによる)

STAGE

- Passion Flower Hotel
- Lolita, My Love (1971)
- Billy (1974)

JOHN

バリーと語る

★河野基比古



モーリス・ロネか、ひょっとするとメル・ファーラーみたいな二枚目。……そんなポートレート1枚がジョン・バリーのおもかげを知るたったひとつのよすがだった。作曲家の顔写真というものは、ほんとうにすくない。

東京のホテルの混雑したロビーに立ったバリーをみて、ボクはオヤッと思った。背が高く、髪が薄く、面長にメガネをかけた怪人！決して平凡ではなかったが、二枚目でもなかった。およそ、あのたった一枚の先行して行きわたった写真とはホド違い。

むかい合って、話していると、その第一印象はだいふまた修正された。英国人らしくダンディに背すじを伸ばしてすわり、質問には瞬間的に答えてくる。そのよどみのない早口は頭脳的な回転の早さをものがたる。このくらい機敏な頭をもっていれば、英国諜報部に勤めることもできるだろう。ただ、どことなく微笑を浮かべているとその表情は、かなりシックな印象だ。そのくせやさしい。聞き手に対する思いやりが、その返事の中ににじみ出ている。

イギリス人はユーモリストだ。だからそのふんシニックでもシカダがないのかもしれない。話の途中で、音楽祭の役員が、審査員用の名札をつけているか、と聞きにきた。「つけてないよ」とバリー。じゃあ、お部屋に置いてあるわけですね、と念を押されると、「イエス、部屋にあるよ。でもボクには自分の名前がわかってるから」と怪くイナした。

〈映画音楽の作曲にかかるときの心構えは？〉

どんな映画でも、三通りや、四通りのやりかたが考えられる。管主体でやる、弦でやる、ロックでいく、などやり方は沢山あるわけだが、最初にやることはそのやり方の決定だ。いちばんふさわしくないものを消していく。皮をむいていくように、構想の悪い部分はとりのぞいていく。すると決定的なも

BARRY

のが最後にのこる。これが作業にかかる前の精神的なプロセスだ。

作曲に使える時間は、2、3週間しかないときが多い。「ゴールドフィンガー」のときなど、金曜の夜になって最後の二巻があがってきた。終わりのもりあがりの部分で、いちばん音楽ロールの多いところだ。土、日と作曲して、日曜にはもう録音。まったくアタマにきたよ。1日、1巻分の作曲をしたことになる。(日本の映画音楽が全巻を3日でしあげているのにくらべればなんでもないことだが、日本映画の事情の方が異常なのである)

〈このごろミュージカルなどの音楽のお仕事が多いようですが、映画音楽とはかなり違うものですか〉——

映画音楽の場合は主題歌ひとつにしても、その映画全体の構成や、感覚を象徴しているものでなければならない。それに対してミュージカルの歌を例にすれば、劇の機能の一端であること、つまりもうそれはひとつの要素になってしまっている。技術的にずいぶん違ってくるわけだ。映画音楽の場合アメリカで言えば平均28人の編成を使う。演劇ではそれが4人でもいいわけだ。

演劇の場合はたっぷり時間をかけて満足するまで修正できるからいい。上演中でも修正がきくのだから——

〈作曲家では誰の影響を受けたと思いますか?〉—— さあ、それはひとつでは言えないが、オーケストレーションに関してなら、プロコフィエフをよく聴いている。プロコフィエフは好きだ。「フォロー・ミー」のときのマーラーの曲は、原作の舞台劇から使われていたもので、ぼくの好みでとりあげたんじゃない。ただスコアの譜面は

安く手に入ってたすかったけど。

—— 今までつき合っているいちばんウマの合った監督はジョン・シュレシンジャー(「真夜中のカーボーイ」)だ。リチャード・レスターもいい。が誰よりも、ぼくを映画音楽の仕事に本格的にひっぱりこんだのはブライアン・フォースだ。彼は「L型の部屋」(未輸入)をとるとき、ナイトクラブのシーンでぼくのジャズを使った。「デッドフォール」(未)では新しい試みもやらせてくれた。彼は親友だし、人間的にもとてもひかれている。(ブライアン・フォースは日本ではあまり知られていないが、俳優・脚本・監督・プロデューサーとオールラウンドの才能の持主だ。音楽にもくわしく、ロイヤル・バレエ団のステエフ

とマーゴの映画「華麗なるバレエ」ではナレーターとして声をきかせている。)

軍隊にいたときはダンス・バンドにいてトランペットを吹いていた。もっと子供のときは家が映画館だったので毎日映画の中で暮したようなものだ。「チャップリンの黄金狂時代」ヒッチコックの「レベッカ」「オズの魔法使い」トーキー初期の「フランケンシュタイン」のシリーズなどがぼくのベスト・ピクチャーだ。最近ではベルイマンの「叫びとささやき」に強い感銘をうけた。

……映画という大海の中で泳いでいるようなバリーだが、決して映画に溺れてしまっただけではなかった。映画を、そして人生を確かな眼で見つめている。







《座談会》

ジョン・バリーは “サウンドの魔法使い”

★河原晶子

★日野康一

★柳生すみまる

★山口絃子

(50音順)

日野 まず、ジョン・バリーの来日印象から話を始めましょうか。

河原 私はネ、彼が嫌いじゃないし、昨(73)年急に会えるというので胸がドキドキしちゃったの。でもネ、いざ会ってみると、いわゆる格式高いアングロ・サクソンというイメージがすごくするのネ。彼のもの静かな雰囲気もそうだったし、外観もネ。そうよ、背は大きいし、額も大きい、目鼻立ちも並み外れて大きい。ミシェル・ルグランとかモーリス・ジャールといったラテン系の人たちというのは話していて親しみがわいてくるんだけど、そういう意味で彼は近よりがたいって感じだったワ。

山口 すると何ネ。音楽の方が親しみやすいみたいネ。彼の音楽って女性の琴線にふれるって感じヨ。

河原 そうネ。音楽も、それを創るご本人も大変にハンサムなんだけれども、作者は私たちと一線を向いているみたいなの。

日野 イギリス人にはけっこうそういうタイプの人がありますネ。音楽家というよりはむしろビジネスマンみたいなのがある……。

柳生 そして少し意地悪ないい方をすれば、この人は正式に音楽をマスターしていないし、イギリスがうるさい階級についていえば、ミドルクラスの出身ですよネ。いってみればたたきあげの職人っていったところでしょう。これに持ち前の内気な性格が加わると、これはどうも我々の手では彼の本性をつかむことがむづかしくなっちゃうヨ。それにネ、もしジョン・バリーをスターに見立てるなら、マイケル・ケインのイメージではないかなと思う。(笑い)

山口 そうよ、外見は似てないけど、個性としてつかむとピッタリかも知れない。ハンサムでレディー・キラーのところも似てるワ。(笑い)

日野 そのハンサムという言葉がイギリスではちょっと違う。

山口 では甘さのないハンサムじゃないかな。(笑い)

私はネ、まだジョン・バリーには会ってないのですが、たしかに音楽的にいっても、いわゆる《人間くささ》というものをあまり感じさせない人だワねー。だから《007》みたいな曲が作れるのかしら。彼の作品で人間的な暖かさというものを感ぜさせたのは『フォロー・ミー』が初めてではなかったかしら。最初の頃、ポップス調のいいサウンドを持ち込んで注目されたワケヨネ。でも話題となった『ナック』にしても、ヒューマンなタッチより、もっとクールなものの方が強かったワ。

山口 最初は007のデンデケデーで売り出し、だんだん華麗な味つけをして、少しづつ洗練されて出てきた彼の新境地の味。そのへんのところが私はおもしろいなと思うワ。

柳生 ボクはネ、良い悪いは別として、バリーという人は割りかし不器用なんじゃないかと思う。素材になるものをそのままの形で出している。でもこれが彼の成功のポイントかも知れませんネ。たとえば、ボクは彼の作品としては初期の『ズール戦争』を買っているんだけど、ここでは映画の舞台となっているアフリカの音楽、特にリズムをナマの形で取り入れているんでネ。同じアフリカを舞台にしてもへ

ンリー・マンシーニは『ハタリノ』では終始マンシーニ調であったけど、バリーの場合はずいぶんとくさい音を生んでいたあたり、いかにも彼らしいと思いますヨ。

山口 マンシーニより野性的なのネ。

柳生 そうですネ。これがより成功したのは『野生のエルザ』でしょう。もっともボクはそればかりでない彼の面を引き出すのに、いろいろと刺激を与えてくれたのがブライアン・フォブスではなかったと思いますがネ。フォブス監督とジョン・バリーは今迄に6本一緒に仕事をしていて、そのうち日本で公開されたのは『デッドフォール』(本邦未公開)だけど、このフォブスって言う人はバリーにずいぶん無理を承知でいろんなことを注文したらしいですネ。むづかしい宿題に答え、ますます磨きをかけるみたいで、これでバリーはずい分と成長したのではないかな。たとえば『デッドフォール』では、撮影前に音楽を書かされたんですネ(普通、音楽は映画製作の最終段階で音入れが行われる)。しかもそれは17分も切れ目なしに演奏が続くコンサート用のものなんです。実をいうと、演奏会の隣では盗みが行われているワケですが、映画ではこの20分間近く、セリフはひとつも入らないで、コンサートと盗みがクロス・カットで進められているんです。ジョン・バリーもこれだけの曲を書くというのはかなりしんどかったのではないかと思いますネ。その曲というのは「ギターとオーケストラのための協奏曲」という格調高いもので、これが彼の芸域をさらにひろげるキッカケにもなったように考えられま



すネ。

河原 そえですネ。私が彼に会ったときに、クラシックとか、シリアス・ミュージックを作る気はありますかと聞いたら、もう実際に映画でやった、といていたの。多分そのことだったのネ。

日野 その時、バリーはこうもいってましたネ。自分の作風が最もハッキリと出たのがその『デッドフォール』だと。そしてつけ加えて『真夜中のカーボーイ』と『フォロー・ミー』だといっていました。

河原 まあその延長が史劇なのネ、この人にはこのタイプのものが割りとあるのネ。『冬のライオン』『クイーン・メリー／愛と悲しみの生涯』そして『最後の谷』もそうでしょう。だけど私はジョン・バリーの史劇の音楽はあまり好きではないワ、立派だけれど余り印象には残らないみたい。

山口 その史劇というのはむつかしいって感じネ。勿論音楽的にだけれど……。

河原 そう、むつかしいのでしょネ。かつてハリウッド全盛の頃にはやたらと多かったし、それにイギリスはシェークスピアの国だし、バリーにとってはニガ手のレパートリーかも知れないけど、逆にそれに対して強いあこがれみたいなものを持っているのではないかしら。

《007》は映画音楽のパロディ!

日野 さて、ここで少し007の話に入りませんか。007を映画化するにあたって、原作者イアン・フレミングは条件をふたつ出したといわれますネ。芸術性が第1、そしてもうひとつは娯楽性ということです。芸術性を重んじるハリー・サルツマンと、娯

楽性を重んじるアルバート・ブロッコリーの双頭プロデュースになっているのもそのタメですが、ジョン・バリーを推したのはサルツマンといわれますヨ。つまりバリーが音楽を担当したそもそもの狙いはこの映画に芸術性を与えようということだったんですネ。

山口 やはり007というと、あのアクの強いショーン・コネリーのイメージなのネ、だからそういった点をプロデューサーとしては変えたかったんでしょうネ。

柳生 それもあってでしょうネ、ところでバリー自身がこんなこといっているんですネ、007の音楽というのは、いわゆる映画音楽のパロディである。このパロディという表現はあまりうまくありませんが、とにかく、この映画にあっては、恐ろしい場面となれば音楽の方もそうならなくちゃあならない、といういわば鉄則みたいなものがあるワケですヨ、それをバリーはかなりシニカルな見方をしているんでしょうが……。

日野 でも定石通りにやってはアキが来、行き止りになってしまう。

山口 それは本人にとってもそうでしょう。長くやってたら本当にアキてくると思うワ。

柳生 だから素材としてはつまらないし、お金だけのための仕事になってしまう。

河原 それはそうでしょうネ。

日野 でもあれだけやれば立派ですヨ。

河原 彼自身は『ゴールドフィンガー』が一番好きだといっていましたネ。作品的にもやはりこれがよかったみたい。

山口 私はネ、このシリーズでは主題歌「ロシアより愛をこめて」(作詞・作曲はライオ

ネル・パート)がうまく使われていた『危機一発』が一番女性にウケたと思うんです。実をいうと私が最初に見たのがこの作品で、ステキだなあと考えてあわてて2番館で第1作『007は殺しの番号』を見て、その音楽がファンキーであったのにビックリしたのヨ。

河原 賑のところなんか面白かったわネ。カリブソを作ったりしてエキゾチックだった。

柳生 これも舞台となったジャマイカの雰囲気をよくつかんでいるんですよネ。それと盲目の黒人3人が実は殺し屋なんていうのもコミカルなようでいて音楽的にドスが効いていましたネ。

河原 それとこのシリーズ全般についていえば、マット・モンローとか、シャーリー・バッシューとか、あるいはトム・ジョーンズといった歌手が、この映画で主題歌を歌うことによって国際的なスターダムにのしあがったということは重要ではないかと思うんです。

山口 そうネ、そして「ゴールドフィンガー」というとシャーリー・バッシューのイメージが強いし、「サンダーボール」でもトム・ジョーンズの方が強い。

河原 バリーは表面立たないけども、陰での存在は大きいワケですネ、そういった点で彼はいいセンスしてきますネ。

山口 初めはイギリスの歌手ばかりで、そのうちにナンシー・シナトラとかルイ・アームストロングといったアメリカの歌手も出てきましたネ。

柳生 もっとも、これはイギリスの歌手を売り出そうとずい分意識的に作っていますネ。また男女を交互に起用して行くというプ



河原晶子



ランもあったみたいですヨ。

日野 これはジェームス・ボンド・シリーズは100%がイギリス資本で作っているからですヨ。パイ・ブリティッシュのポリシーで買われているんですネ。また政府から助成金をもらっているんですヨ。

河原 ロシアで、彼が来日した時に尊敬する音楽家はときいたら、プロコフィエフとバルトーク、それにマーラーだというネ、そして映画畑ではニーノ・ロータをあげていたのは面白いなあと思ったの。

日野 ちょっとバリーの音楽とは結びつかないみたいだけど、オーケストラの使い方のうまさという点で一脈通じるものがありますネ。

河原 そうネ、彼の場合、ポップス色の強いものとそうでないものに分けられると思いますがその後者、つまり劇映画(メロドラマ)用の音楽に属するのが彼のそういった面なのネ。

柳生 1960年代は007シリーズのスタートでもあり、またビートルズの登場でポップス界に革命が起きた時代ですよネ。ジョン・バリーというのは、いかにもその時代に登場した人にふさわしいと思うんだナ。勿論、先輩にはヘンリー・マンシーンというのがいるワケですが、とにかく彼はそれ迄がストリングス偏重の音からエレキ・ベースやパーカッションの使い方新しい目に向け、新時代にふさわしい音楽を創ったといえると思いますネ。

山口 いわゆるオーソドックスな音楽の勉強をしていないというのが、かえって強味となって、大衆によりアピールする音を書いたということになりますネ。

指揮者としてのバリーの魅力はにかに？

日野 そろそろ彼のステージのことになりますヨ、これは面白くなりそうですネ。

山口 先のカルロ・ルスティケリの公演ではコンサートの構成がとってもよかったワ。音楽にそのまま入って行けるような雰囲気がよく作られていたみたい。映画の思い出、その主題曲の思い出、そして自分の青春の思い出とがダブっているような感じだったネ。それがまた今度も楽しめそうだワ。バリーの場合はルスティケリとくらべ若いだけに、もっとハデな感じになると思います。それに何ととっても007のイメージが強いしネ。

河原 今迄はネ。作曲家としてのバリーの顔だけしか見てこなかったんですが、今度は指揮者としてどういう振舞いを演じるかとっても期待していますワ。たぶんスマートだと思いますが……。

日野 背は高いしネ。スタイルはいいので、きっと見覚えがするでしょう。

柳生 指揮者のポイントは、バック・スタイルですネ。お客さんに背を向けて、いかに絵になるかといえば、彼の全身で音楽にのってなかったら様にならない。さあ、バリーがどこまでのるか、そこが見ものではありませんか。

日野 これは何もバリーに限ったことじゃないけど、ナマの音楽を聞く楽しみというのは、その人が持っているサウンドの秘密が分る、実体が見られるということですよネ。

河原 そしてアレンジャーとしての彼の腕前も、映画を離れて聞くというのも大変に面白

いと思われますネ。彼のオーケストレーションというのは、先にもいったんですが彼が尊敬しているプロコフィエフの流れをくんだような、なかなか重厚なところが魅力だと思うんです。

日野 それではそろそろラストになったので、皆さんがお好きなジョン・バリーの作品を2本ぐらいあげてもらいましょうか。

河原 私は『ナック』と『フォロー・ミー』ですネ。特に『ナック』は最高ですネ。クール・タイプのジャズがとってもよく生かされていたと思います。

山口 そう、私は大衆的に受けたという点、また007シリーズを強烈に焼きつけたという点で『ゴールドフィンガー』。それに『冬のライオン』非常に地味でしたけれど007とは対照的な作品という意味でネ。

柳生 ボクは『ズール戦争』と『国際諜報局』この2本は彼の音楽の原点を示しているように思えますネ。

日野 そうですか、それでは重複しないという意味から『野生のエルザ』と『さらばベルリンの灯』がいいと思います。

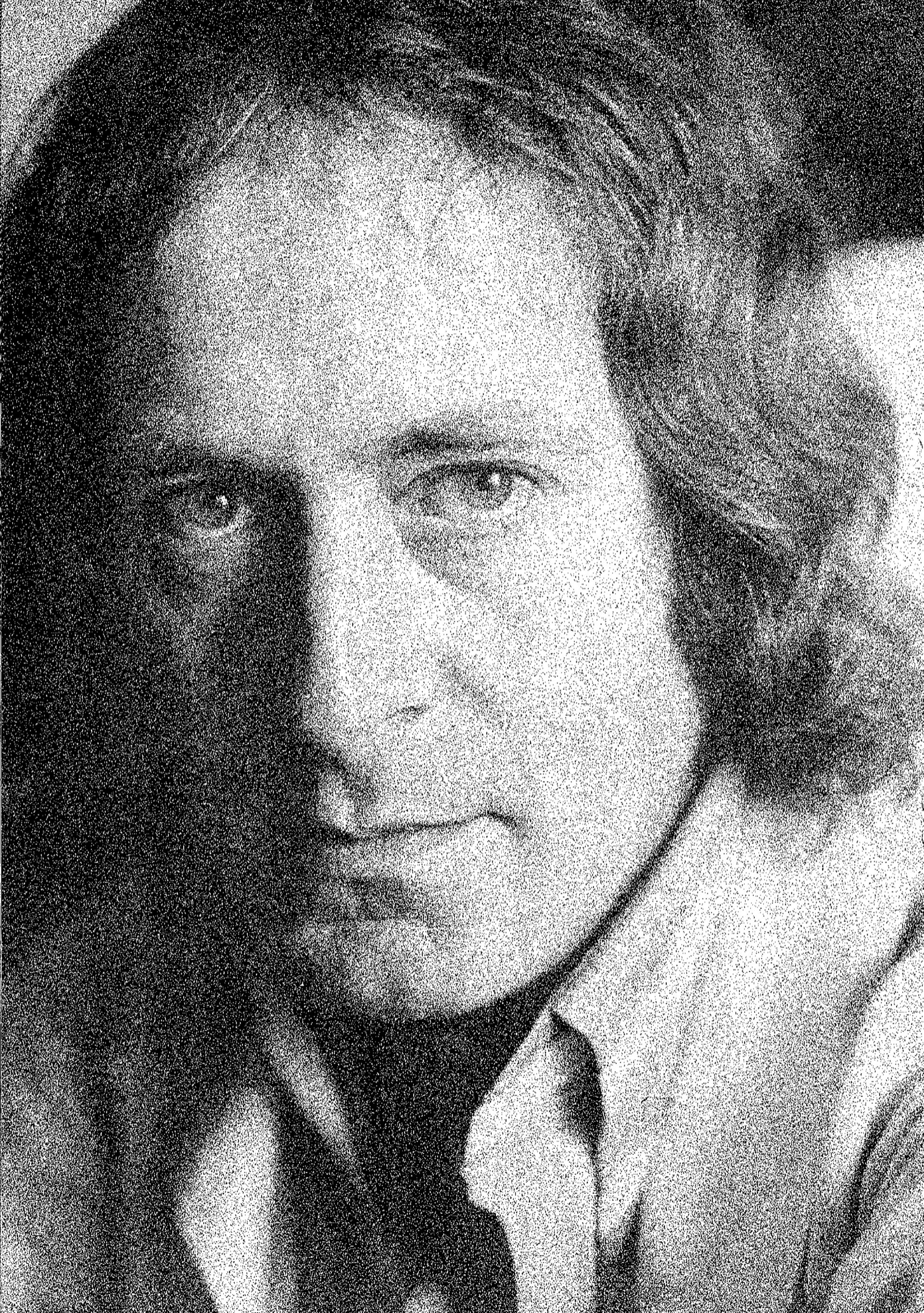
柳生 あっ、ひとつつけ加えれば『モンテ・ウォッシュ』主題歌がとってもよかったナ。

日野 それに今日は話題にのぼってこなかったんですが、『約束』や『夕なぎ』みたいなものは、わりかし日本人向きかも知れませんがネ。

河原 『約束』は映画もよかったし、音楽も素敵でしたネ。



柳生すみまろ



ORCHESTRA LIST. JOHN BARRY TOUR-JAPAN 1975.

John Barry

Sam Bass

Alan Ratcliffe.....Harp

Aandrew Mcgavin·Horn

Jim Buck Horn

Stan Roderick.....Trumpet

Greg Bowen.....Trumpet

Tony Fisher.....Trumpet

Eddie Blair.....Trumpet

Don Lusher.....Trombone

Nat Peck.....Trombone

Bobby Lamb.....Trombone

Wally Smith..... Trombone

Ken Goldie..... Bass Trombone

Roy Willox..... Alto sax, Flute & Piccolo

Bill Skeat..... Alto sax, Flute & Alto Flute

Keith Bird.....Tenor Sax, Clarinet
& Bass Clarinet.

Eddie Mordue.....Tenor Sax, Alto Flute & Clarinet.

Manny Winter..... Baritone Sax, Flute
& Clarinet.

Kenny Clayton..... Keyboards

Colin Green.....Electric Guitar

Dave Richmond.....Electric Bass

Harold Fisher..... Drums

Eric Allen..... Percussion



ジョン・バリ―はタテ割り社会を ヨコに疾走している

★河端 茂

ジョン・バリ―について思いをめぐらすとき、きまってグレアム・グリーンを想起するようになったのは、いったい何時からだったろう？ 学生の頃すでに、日記をつける習慣を失なっているので、それを確かめるすべもないのだが、いま、おぼろげな記憶を辿ってみると、7、8年前に聴いた1枚のアルバムが原因になっているらしい。

ジョン・バリ―がCBSと契約を結んだ最初のアルバムで、A面に「007」シリーズを、B面に「ナック」や「逃亡地帯」「野生のエルザ」「国際諜報局」などのテーマを収録した、彼の自演レコードだったと思う。

そのとき改めて、彼が手掛けた作品に「追跡」を扱ったものが、いかに多いかを痛感した。なかには「追いつ追われつ」もあったし、もっと気楽な「追っかけっこ」もあった。ひたすら「駆け抜ける」だけのものだって含まれている。だが、そこに大きく共通しているパターンは、グレアム・グリーンのおまりにも有名な《追う者と追われる者》のテーマに酷似している。

もちろん、いまの映画に「追跡」の場面は掃いて捨てるほどある。そのなかでグリーンが描く「追跡」と、バリ―の奏でる「追跡」が、ことさら異彩を放つのは何故か。それは彼らがイギリス人だということ。そしてイギリス独特の市民社会構造のなかで生きている、ということと関係がある。

イギリス社会の保守性はよく指摘される。それは、きわめて強固なタテ割りの階層社会





の“追跡”構図を、なまなましく支えているのではないか。アメリカ人にとって追跡とは、あの広大な空間と切り離せない。スポーツにも似た一種の爽やかさが生じてくるのは、おそらくそのせいだろうが、イギリスの典型的なプチ・ブルであるグリーンとバリーにとっては、タテ割りの社会構造の真っ只中を、水平に疾走することなのだ。ビートルズは「ハード・ティズ・ナイト」の疾走からはじまって、「レット・イット・ビー」の隔絶された屋上での演奏で終わったが、グリーンとバリーの追跡は、果てしなくつづいている。“垂直式”と“水平式”の宿命的な違いかもしれない。

いままで便宜上、グリーンとバリーを並列してきたが、もちろん“追跡”を描くふたりの構図には、大きな差異がある。グリーンは追われる者と追う者を、それぞれ鋭く凝視することで、緊迫した文体をつくりあげる。これに対してバリーは、追われる者と追う者を同時に眺望し、そのスリルを自分の体内に通過させながら、彼自身の美しい音を綴っていくのだ。

グリーンはいわば単眼を駆使して、文学者でありながらフラッシュ・バックの手法など、きわめて映画的な世界を構築し、バリーは複眼で透視しつつ、逆に文学的ともいえるモノローグの手法で、脆いほど華美なスリルのメロディを創造する。この対照はみごとに皮肉である。

そういえば、グリーン原作の映画化に、バリーが音楽をつけたという話を、ほくはまだ聴いていない。

微妙な問題だろう。少なくとも彼らが、その後経験した孤独や分裂、変身を思い合わせれば、問題の複雑さがよくわかる。ジョージ・メリーのいう“垂直式”雰囲気を含めて、これは言えるのだ。

グリーンやバリーの“追跡”は、決して下から上への構図をとっていない。彼らが下層社会の出身でなかったことも、大きく原因していよう。しかし、グリーンにしてもバリーにしても、その青春はタテ割り社会との息詰まるような拮抗に、明け暮れていた形跡がある。

その一例が学校生活で、バリーのきわめて突飛な中退事件は象徴的ですからある。また、最近出たグリーンの自伝を読んでも、その大半が学校での生活に費やされている。それはあの仮借ない映画「イフ」の描写へと、否応なくほくの連想を導いていったのだが、確かにイギリスの学校組織は、イギリスのタテ割り社会構造のしたたかなミニチュアだといえるようである。

ふたりはそれぞれの仕方、イギリスの学校組織から陥穽した。このときの感覚が彼ら

で、労働党の福祉政策でめでたく解決するようなシロモノではない。60年代の“イギリス無血革命”が、激烈な“下剋上”のエネルギーを噴出させたのは、このタテ割り社会に対する下層社会の攻撃であったからだ。下から上に鋭い矛先を向けて、ついにピラミッドの頂点に抜け出した何人かの若者がいた。ビートルズ、ローリング・ストーンズ、トニー・リチャードソン、アーノルド・ウェスカー、メアリー・クワントなどなど。

だが、彼らが翹首を望む頂上に立ったとき、はたして“革命”を実感したか、それともたんなる“征服感”にすぎなかったか、これは

『ボンド』

★武田一男

ジョン・バリーの華麗なオーケストレーションを十分に堪能し、そのあと、お酒でも楽しんで、素晴らしい一夜の仕上げをやらうとお考えになっている人の為に、ジェームス・ボンドにちなんで、お酒の楽しみ方を少しだけ、紹介してみよう。

周知の如く、ボンドはお酒が好きである。しかし、ボンドの場合、仕事の緊張感をほぐすためとか、仕事上の不必要な、つきあいで飲酒することはなく、あくまでもお酒そのものを、その時いっしょに飲んでいる相手や、その場所の雰囲気に合わせて楽しむことを、正確に心得ているとわかっていい。それは長いお酒の伝統の上に成立っているルールとお酒そのものの正確なる知識を、ボンドが日頃から大切にしていることにほかならない。

御記憶の方も多と思うが、ボンドがイギリス情報部にばけたロシアの殺し屋を、オリエント急行の食堂で、見やぶることが出来たのも、殺し屋グラントが、白ワインと赤ワインを間違えて、オーダーしたことから始まったことであり、ロワイヤルのカジノのレストランで、美しいヴェスパー・リンドの心をつかまえることが出来たのも、少しキザすぎるくらいはあったが、ボンド得意のシャンペン論に由縁するところが多かった。

さて、そんなボンドが、常に愛飲しているお酒といえば、第1にはバーボンウイスキーを上げねばなるまい。このごろ、東京でも、かなりのバーボン・ブームで、六本木、銀座あたりで、バーボン・ハウスという専用の酒場まで出現し始めた。スコッチにくらべて、世なれた、まろやかさには欠けるかもしれないが、その素朴で独特の薬味の香りが、清々しく、コカ・コーラに親しんだ口には、なじみやすいのかもしれない。バーボンの中でも、ボンドは「I・Wハーバー」「オールド・ファッション」を好み、時々、バーボンの最高品「ジャック・ダニエル」をオーダーしているようだ。

ボンドの親しい友人に、C・I・Aのフィリックス・レイターがいる。テキサス出身の陽気なこの友人と共に、ボンドは数々の危険な任務につくが、そのあいまをみて、2人で楽しく酒をくみかわすことが多い。ボンドはこのアメリカ人から、本来、バーボンはアメリカ開拓時代からの地酒なのであるから、トウモロコシウイスキーの本当の飲み方は、生一本な冷たい山の溪流で割って飲む、いわゆる「溪流割り」であると習う。今冬の雪山で、スキーを楽しみながら、バーボンの「アルプス溪流割り」でもやってみるのもいいだろう。

ところで、レイター自身は、皮肉にもスコッチ党であり、イギリス人・ボンドはスコッチはほとんど飲まない。その上紅茶まで嫌っている。しかし、日本へきた時のボンドは、もっぱらサントリーを愛飲していた。蛇足であるが、バーボンは「ジャックダニエルの黒」でボトル9,000円~9,500円くらい。「I・Wハーバー」「オールド・ファッション」で3,000円~4,000円とスコッチなみの価格である。バーボンはくせが強すぎるという人は、カナダウイスキーの「シーグラム」か「カナディアンクラブ」がいいだろう。スコッチとバーボンのミックスした中間派で、むしろ女性向きといえる。

バーボンの次にボンドが愛飲するのは、ドライマーティニがある。一般に欧米人は、マーティニを好んで飲んでいる様であるが、ボンドのマーティニは、ボンドが自分で配分を考案したもので、カジノ・ロワイヤルのバーで、粹人、レイターをすっかり感心させてしまう

「ゴードンジン3、ウオツカ1、キナ・リレのベルモット½、それにレモンの皮をうすく大きく切ったやつを入れた」このカクテルは、レイターが「モロトフカクテル」と名付けただけあって強い酒で、ボンドは夕食前には、一杯以上は飲まない方が



とお酒』

いいと忠告する。先日、帝国ホテルのバーで、この話が出た時、「ゴードンジン1.9オンス、ウオツカ1オンス、キナ・リレのベルモットを0.1オンス」とした方が日本人向きですよというバーテンダーの意見であった。もっとも、ボンドのマーティニは、「深いシャンペングラスに入れた」ものであり、帝国ホテルのマーティニは、普通3オンスのグラスに入れたものなので、量も全く違うが。参考までに、ホテルで飲めばこのカクテル、500円ぐらいで飲めるということを書いておこう。

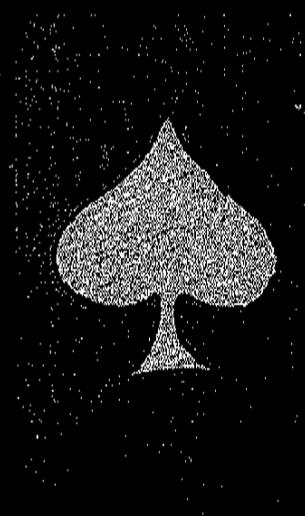
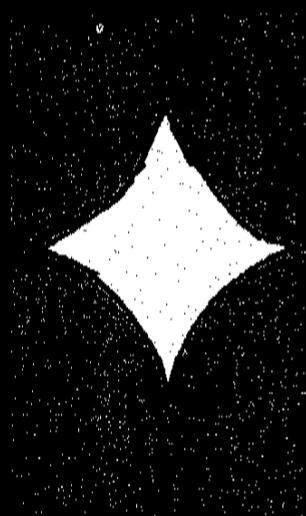
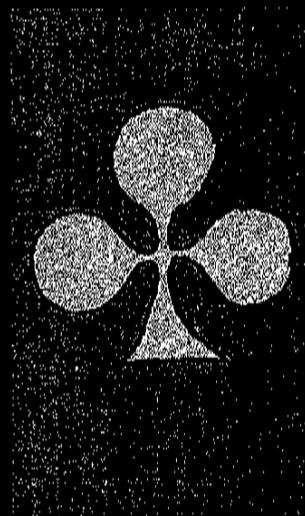
さて、このマーティニには後日談がある。ニューヨーク、マンハッタン、西46番街にある「サーディ」というレストランで、レイターが、キナ・リレのベルモットを、カリフォルニア産のクレスト・ブランカベルモットに変えてしまう。ボンドは、おかげで「モロトフカクテル」の味が深まったのに感動し、その後は、ほとんど、クレスト・ブランカのベルモットを使用している。

カクテルの話をもう少し続けてみよう。ボンドは、ゴードンジンをトニック割りした「ジントニック」もよく飲むが、それより、食前には、キャンパリ、またはチンザのベルモットをベリーエールのソーダーで割って、レモンをそえた「アメリカーノ」などの甘口も時おり、オーダーするし、ゴードンジンを使った「ネグロニ」なども飲んでいる。これ等のカクテルは、主として、女性にすすめるものであるが、ボンドが、女性のためにオーダーするカクテルでは、むしろ「ダイキリ」が多い。ロワイヤルレゾーのホテルではボンドの奥さんだったトレーシーにも、アルプスのビス・グローリアのレストランでは、イギリス娘のルビーにも、バカダイの白ラムとレモンジュース、それに、シュガーシロップを加えた、この中程度に甘いカクテルをすすめている。その他、ウオツカにトマトジュースを入れ、レモン、塩、ペッパーを加え、ウスターソースをミックスした「ブラウディ・メアリー」や、ウオツカにピタースをワンダッシュ入れてトニックで割ったカクテルを食べすぎて、胸がもたれた食後などに飲んでいる時もある。以上のカクテルは、どこのホテルでも、作ってくれるので、女性同伴の時は、試飲してみることをおすすめする。

最後に、酒の下様というべき、シャンペンとワインについて、ふれるべきだろう。エブタールで、ボンドがシャコの焼肉と一緒に2分の一びんほど飲む「ムートン・ロスチャイルドの53年もの」ワイン、そして、ロンドンのプレイズクラブで、上司のMこと、サー・マイケルズ・メッサヴィ海軍中将与飲む「ドム・ペニヨン46年」のシャンペン、このふたつは、まさに世界的名酒である。11月末に米口したアメリカのフォード大統領主催のディナーパーティーでも、このふたつの名酒が出たとのことであった。ちなみに帝国ホテルで、これを飲めば、ロスチャイルドワインが、ボトルで30,000円、ドム・ペニヨンのシャンペンが、16,000円であるから驚く。どこかの議員さんのサラリー袋まるまる拾った幸運な時などには、飲んでみるのも悪くはないだろうが、普通では、「ボメニュー」のシャンペンか「モエシャンドン」あたりで最高のディナーとなるだろう。

この外に、日本に輸入されていない「タタンジェ」「ブル・ブランド・ブラン」「クリコロセ」また、ブランデーで、「マルサラ」のブランデー、コルシカ産の「グレープ・ブランデー」など、かなりの品名が、ボンドの酒のレパートリーには登場するが、このあたりは、実際には、入手しにくいお酒なので、紹介も程々にしておくことにする。ボンドのお酒の知識が、あなたの今宵の酒宴の参考になればと心から念じて、終わりにしたい。

(ジェームス・ボンド研究家)



ジョン・バリーが作曲した 映画の中から 私がえらんだ ベスト・ヒット

★小藤田千栄子

1973年の5月、東京音楽祭に来日したジョン・バリーに、日野康一氏のアレンジで会わせていただいた。音楽関係の評論家諸氏の末席にすわらせていただいたわけだが、なんとも優しい方なので正直言ってビックリ。「007」シリーズの、あの歯切れのいい、ワクワクするような音楽をお書きになる方なので、もっとビリビリとした、例えば敵と対面したときのジェームズ・ボンドみたいな人を勝手に想像していたので、これは意外な発見だった。薄いサングラスの奥から相手の眼をじっとみつめて話しかけ、服装はといえば茶の濃淡で統一した、おしゃれなイギリス紳士だった。映画は、音楽を担当するだけではなく、映画そのものにも大変興味を持っているような印象を受け、総合芸術の一翼を担っているのだという自信と責任のほどがうかがわれて頼もしかった。フィルモグラフィーを調べてみると、やはり当然のことながら圧倒的にイギリス映画が多く、以下、彼の代表作、そして映画としても、とりわけ面白かった作品を選んでみた。やはり「007」シリーズから始めるのが順序というものでしょう。

★「007」シリーズ



第1作は「007は殺しの番号」、リバイバルでは「ドクター・ノオ」と原題をそのままを使用。まだやせていて、とてもスマートだったショーン・コネリーが、さっそうとカリブ海へ乗りこむ。「ボンドの007のテーマ」を作曲したのがジョン・バリー。続いて「007/危機一発」、リバイバルでは「ロシアより愛をこめて」。2作ともテレンス・ヤングの腕冴えわたり、コネリー・ファン上昇。第3作は「007/ゴールドフィンガー」。黄金狂と対決するこの作品あたりから人気定着し、第4作「007/サンダーボール作戦」で正月映画に仲間入り。観客動員は記録を作ったが内容的には、ますますスーパーマンになり、第5作「007は二度死ぬ」で日本ロケ実現。第6作「女王陛下の007」ではショーン・コネリーおり、モデル出身のジョージ・レーゼンビーが2代目のお披露目。だが彼成功せず、やっぱりコネリーねえーなどと言っていたら第7作「007/ダイヤモンドは永遠に」で復活。しかしながらこれ1作のみで、次の「007/死ぬのは奴らだ」でロジャー・ムーアが3代目襲名。続く最新作「007/黄金銃を持つ男」も、ロジャーがつとめて目下公開中。このシリーズは、例えばモンティ・ノーマン、例えばポール・マッカトニーなども作曲をしているが、やはりジョン・バリーのもの。一貫して協力している強力なスタッフの1人だからだ。そして映画のスタッフとは、こういう影の実力者が必要なのだ。

★国際諜報局

近眼のメガネをかけ、スーパーで安物の食料を仕入れアパートで、もそもそと料理する——よく言えば生活の匂いたちこめ、でも、はっきり言うと妙にしみじみした、こんなスパイが、この映画のヒーロー〈ハリイ・パーマー〉だった。主演マイケル・ケイン、監督シドニー・J・キューリー。レイ・テントンの原作を映画化したこの作品は、スーパーマンではないスパイ、男の仕事としてのスパイを描いて出色だった。

★キング・ラッド



あまり宣伝もされずにひっそりと公開され、ヒットもしなかったのを見ていない人も多いと思うが、これは戦時下の、男の生活力を描いた傑作だった。第2次大戦中のシンガポール捕虜収容所。生まれも出身も学歴も全く関係ない男たちの集まりの中で、並の兵隊ジョージ・シーガルだけが異常なほどの生活力をみせていく。だが彼も、戦争が終わり学閥・派閥が力を持ちだしたとき、またもとの冴えない人間になってしまうというアイロニー。

★野生のエルザ



これはもう原作とともにあまりに有名、ライオンの仔エルザと狩猟監督官夫妻との愛情物語。ライオンは野性の動物、だから野に帰さねば……。けれどラスト、立派に〈野生のエルザ〉となった、かつて仔ライオンが姿を見せたとき私たちは、少し大げさな言いかただが、ふと“まごころ”といったものを信じてしまう。ジョン・バリーはこの作品で66年度アカデミー音楽賞と主題歌賞の両方をさらった。

★逃亡地帯

アーサー・ベン監督が「俺たちに明日はない」の前に撮った作品で、いまにして思えばこれはバイオレンス映画のハシリとも言えよう。テキサスの田舎町、表向きは平和にみえるが一朝ことあれば暴力触発の不気味さ。保安官マーロン・ブランド、脱獄してくる町の青年ロバート・レッドフォード、その妻ジェーン・フォンダという布陣。暴徒と化した町民に、殴り倒されたブランドの、なんともすごいメーキャップ。この人も好きですなえ。

★さらばベルリンの灯



ネオ・ナチというのをご存知ですか？ ヒットラー死してナチ政権倒れ、もはや再びファシズムの時代が来るなんて考えられないでしょう。ところがこの映画には〈ナチよ再び！〉とばかり〈ネオ・ナチ〉なる組織が出てきたのでオドロキ。ボスはマックス・フォン・シドー。もちろんこの組織をイギリス諜報部員ジョージ・シーガルらが壊滅するまでがストーリーで、ジョン・バリーの同名主題歌と「愛のテーマ」は、彼の代表作のひとつ。

★冬のライオン

12世紀のイギリス王室の話。といってもロイヤル・ムードはどこへやら、人生の冬をおかえたヘンリーIIが、妻のこと、愛人のこと、後継者のことを、まるでライオンの咆哮のように次から次へと喋りまくるのだ。演ずるはピーター・オートール。王妃キャサリン・ヘップバーンも負けてはいない。よく言えば演劇の面白さ。サブ・タイトルに「ああ言えば、こう言う」とつけたいような台詞の洪水。ジョン・バリーもがんばってオスカー獲得。

★真夜中のカーボーイ



映画というものは、ときとして私などには考えられないような世界を教えてくれるが、1人前の男がカーボーイ・スタイルで身体を売るなんて、そんなことがあるなんて、愚かにも、あるいは清纯にも私は知らなかった。カーボーイのジョン・ボイドと、なんとも冴えない肺病やみダスティン・ホフマン。とりわけホフマンの好演はイヤになるほど。ジョン・バリーは、ロック系のアーティストを多数使い、自らはテーマ曲を作曲した。

★約束



考えてみると、これはとても変な映画なのだ。オマー・シャリフの弁護士が、婚約者アヌーク・エーメのことをコール・ガールではないかと疑い、いくら彼女が違うと言ってもその疑惑から逃れられない。クヤシーツノって彼女は自殺、彼ぼう然。話だけではバカみたいだけど、この映画のムード、よかつたあ。この作品に触発され、松竹の某大監督が宮劇化を考案したのはご存じ？ 題名は「男は愛嬌」、主演は渥美清サンでした。

★モンテ・ウォルシュ

あまり当たらなかったので見ている人は少ないかも知れないけれど、これもいいムード、泣きたいような、たそがれムード。西部開拓の時代はもう終わったというのに、いまだ開拓の夢去りやまず、流れ流れのリー・マーヴィン。そして相棒ジャック・パランス。おさい男が西部のバーで、出逢った女がジャンヌ・モロー。彼女もまたフランスからの流れ者。"流れ者には女はいらねえ"なんて、あれは日活さん。カッコ良すぎますよ。

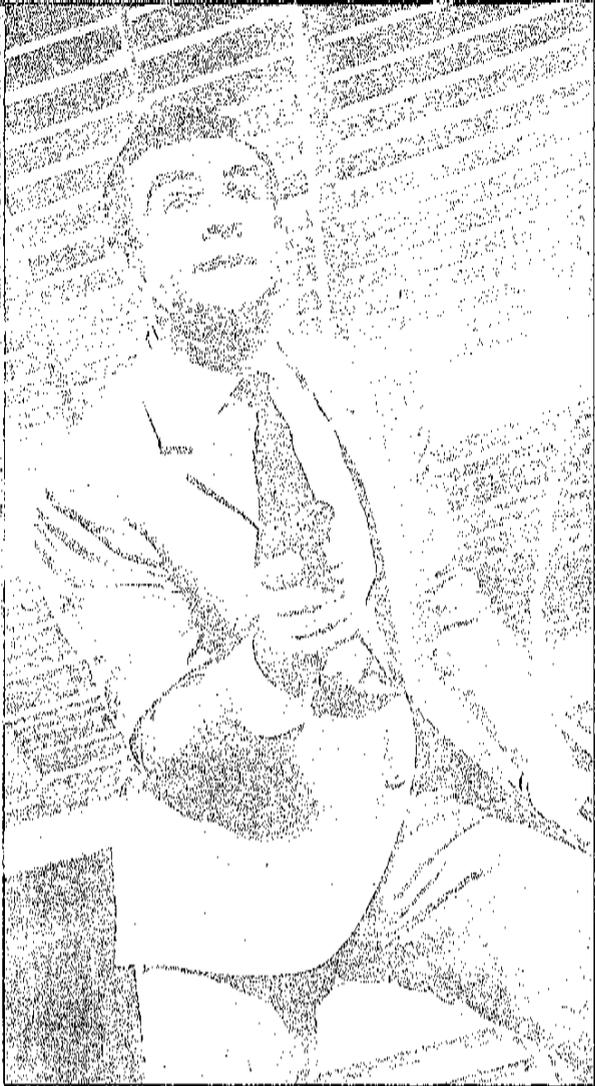
★フォロー・ミー



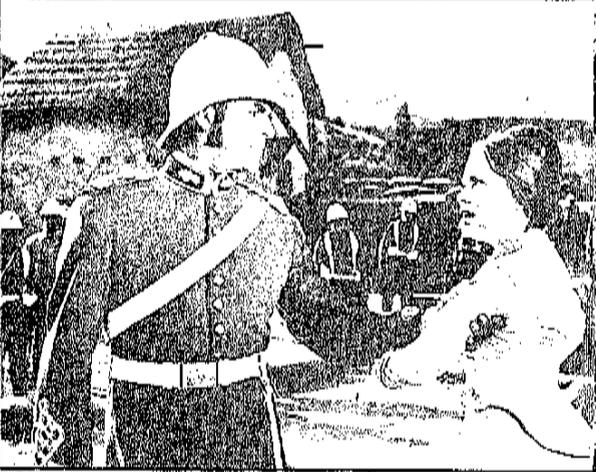
「第三の男」のキャロル・リード監督が、失礼ながら忘れたころに復活した、なんとも軽快な、シャレた映画だった。典型的イギリス紳士と結婚したヒッピーあがりの女ミア・ファローが、なぜか毎日ロンドン散歩。うちの奥さん何してんの？ と疑った旦那が、よせばいいのに探偵をつける。このメイ探偵トルとミア・ファローの、おかしな遠っかけが面白く、ジョン・バリーも、ふわつと雰囲気につけて、いい主題歌を書いた。

(キネマ旬報 編集部員)





JOHN BARRY



民音タンゴ・シリーズ〈6〉

オルケスタ・フルビオ・サラマンカ

タンゴの彗星！ 初来日

3月3日～4月30日まで
全国52会場で公演！

輝かしい色彩感と
さわやかなリズム
絶好調の本格派楽団！



★主催／財団法人民主音楽協会
読売新聞社
★後援／アルゼンチン大使館



ロス・ブリジャンテス



チヨコ

本当は5年前に来日するはずだった！ 高場将美

1970年に民音タンゴ・シリーズが始まったとき、その第1弾の候補楽団としてあがっていたのが、フルビオ・サラマンカとホセ・パッソのふたつでした。民音会員に、まず聴いてもらいたい楽団のひとつですが、色彩感にあふれたフルビオ・サラマンカだったのです。結局スケジュールなどの都合でパッソ楽団が来日し、ダイナミックな演奏で大好評を博しました。このたび、あらためてサラマンカのオルケスタ来日が実現することで、ファンの期待によりやく応えることができます。民音タンゴ・シリーズも、これで欠けていた一片がつながったわけで、タンゴ界の彗星として話題をよんだサラマンカの個性を、たっぷり味わいたいと思います。

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 3月3日(月)6:30p.m. 熊谷会館 | 4月2日(水)6:30p.m. 刈谷市民会館 |
| 4日(火)6:30p.m. 川口市民会館 | 3日(木)6:30p.m. 岡崎市民会館 |
| 5日(水)6:30p.m. 太田市民会館 | 4日(金)6:30p.m. 名古屋市公会堂 |
| 6日(木)6:30p.m. 入間市民会館 | 5日(土)6:30p.m. 厚生年金会館(大阪) |
| 7日(金)6:30p.m. 栃木会館 | 6日(日)6:00p.m. 高砂市文化会館 |
| 8日(土)6:30p.m. 川崎産業文化会館 | 7日(月)7:00p.m. 福井市文化会館 |
| 9日(日)6:30p.m. 大宮市民会館 | 9日(水)6:30p.m. 神戸国際会館 |
| 11日(火)6:30p.m. 小田原市民会館 | 10日(木)6:30p.m. 厚生年金会館(大阪) |
| 12日(水)6:30p.m. 横浜南市民文化会館 | 11日(金)6:30p.m. 厚生年金会館(大阪) |
| 13日(木)6:30p.m. 藤沢市民会館 | 12日(土)6:30p.m. 姫路市文化センター |
| 14日(金)6:30p.m. 相模原市民会館 | 13日(日)6:30p.m. 松山市民会館 |
| 15日(土)6:30p.m. 宮城県民会館 | 14日(月)6:30p.m. 福山市民会館 |
| 16日(日)6:30p.m. 福島県文化会館 | 15日(火)6:30p.m. 岡山市民会館 |
| 17日(月)6:30p.m. 弘前市民会館 | 16日(水)6:30p.m. 倉敷市民会館 |
| 18日(火)6:30p.m. 青森市民会館 | 17日(木)6:30p.m. 広島市公会堂 |
| 19日(水)6:30p.m. 函館市民会館 | 18日(金)6:30p.m. 下関市文化会館 |
| 20日(木)6:30p.m. 旭川市民文化会館 | 19日(土)7:00p.m. 佐世保市民会館 |
| 21日(金)6:30p.m. 帯広市民会館 | 20日(日)7:00p.m. 佐賀市民会館 |
| 22日(土)6:30p.m. 北海道厚生年金会館 | 21日(月)7:00p.m. 大分文化会館 |
| 23日(日)6:30p.m. 小樽市民会館 | 22日(火)7:00p.m. 大牟田市民会館 |
| 26日(水)6:30p.m. 千葉県文化会館 | 23日(水)7:00p.m. 久留米石橋文化ホール |
| 27日(木)6:30p.m. 市原市民会館 | 25日(金)6:30p.m. 高松市民会館 |
| 28日(金)6:30p.m. 長野市民会館 | 26日(土)6:30p.m. 高瀬ホール |
| 29日(土)6:30p.m. 松本市民会館 | 27日(日)6:30p.m. 徳島文化センター |
| 30日(日)6:30p.m. 上田市会館 | 29日(火)6:30p.m. 厚生年金会館(東京) |
| 31日(月)6:30p.m. 金沢観光会館 | 30日(水)6:30p.m. 文京公会堂 |

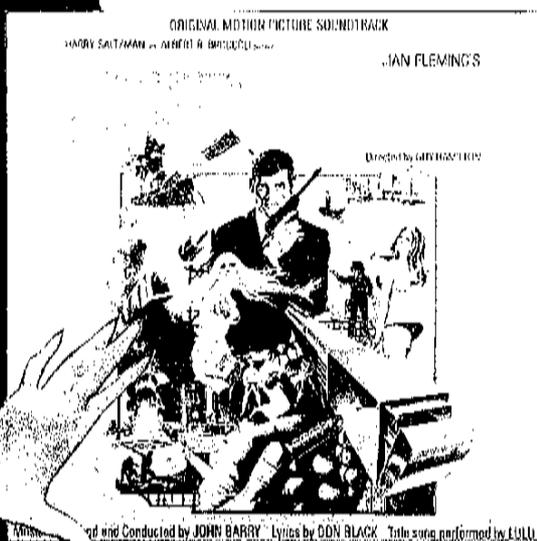
公演についてのお問合せは各地方事務局へどうぞ！



JOHN BARRY

GRAND ORCHESTRA

“来日記念盤”はユナイレコードより
絶賛発売中!!

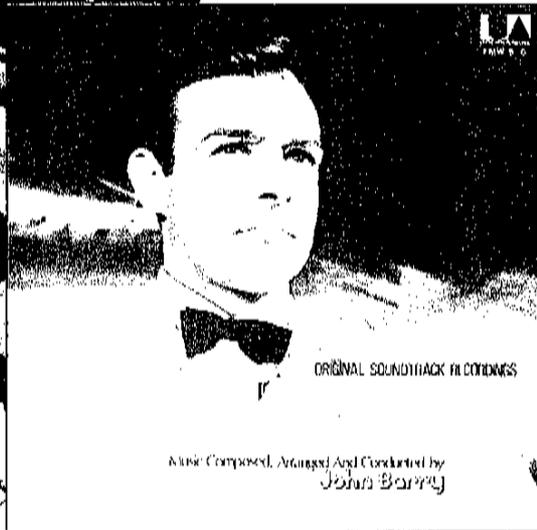


007

黄金銃を持つ男

メインテーマ／黄金銃を持つ男（ヴォーカル・ルル）／スカラマンガの館／魔の島のチェー・ミー／黄金銃を持つ男—ジャズ・テーマ／黄金の弾丸／おやすみ、グッドナイト／スカラマンガの領地へ／誘惑／空手道場の死／魔の島を探して／スカラマンガの館へ／黄金銃を持つ男（ヴォーカル・ルル）

オリジナル・サウンドトラック
（ヴォーカル）ルル
（作曲）ジョン・バリー
■FML-38/¥2,500



007/

スーパーパック

ジェームズ・ボンドのテーマ／キングストン・カリブ／マンゴの木の下で（以上、「007は殺しの番号」より）／オープニング・タイトル（「ロシアより愛をこめて」より）／ボンドのカムバック・ロシヤより愛をこめて—ジェームズ・ボンドのテーマ／ガール・トラブル／ゴールドフィンガーの死（以上、「ロシアより愛をこめて」より）／ロシアより愛をこめて／メイン・タイトル：ゴールドフィンガー—マイアミ／オウリツの工場／ボンド活動再開（以上、「ゴールドフィンガー」より）／ゴールドフィンガー／ゴールドフィンガーの死／ミスター・キス・キス・パン・パン／他

オリジナル・サウンドトラック盤
（作曲・編曲・指揮）ジョン・バリー
（歌）マット・モンロー／シャーリー・バッシュ／ルイ・アームストロング
■FMW-5—6（2枚組）¥3,600



007/ドクターソー

ジェームズ・ボンドのテーマ／キングストン・カリブ／ジャマイカン・ロック／ジャンプ・アップ／陽気なボンド／マンゴの木の下で／ツイステイング／ジャマイカ・ジャズ／マンゴの木の下で／ジャンプ・アップ／ドクター・ソーの幻想／キングストン・カリブ／孤独の要塞／マンゴの木の下で／大追跡／ドクター・ソーの幻想／ジェームズ・ボンドのテーマ／船上の情事

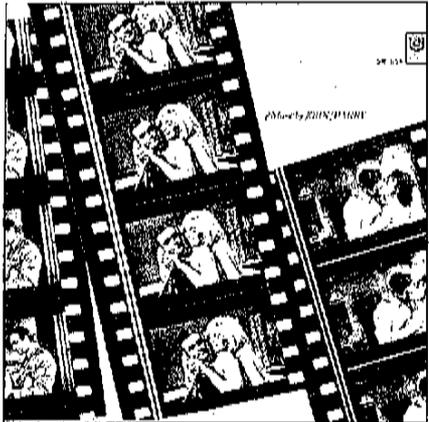
オリジナル・サウンドトラック盤
（演奏）ジョン・バリー
■SR-810/¥2,300



007/ロシアより愛をこめて

オープニング・タイトル／ボンドのカムバック／ロシアより愛をこめて—ジェームズ・ボンドのテーマ／タニアとグレブ／セント・ソフィアの出会／ゴールドフィンガー／ホーン・ガール／トラブル／ボンドとタニア／007／ジプシー・キャンプ／ドラントの死／ロシアより愛をこめて（歌）／妖怪の島／暁のギター／水中ヘリス／マッシュのアクション／ボンドとボンド／忍び寄り／ライラのダンス／ケリムの死／大団円

オリジナル・サウンドトラック盤
（作・編曲・指揮）ジョン・バリー
（歌）マット・モンロー
■SR-754/¥2,300



007/ゴールドフィンガー

メイン・タイトル—マイアミ／アルプスの鷲跡—オウリツの工場／オッドジョブ／ボンド活動再開／ナイーディング・サ・コリアン／毒ガス攻撃／ゴールドフィンガー／ノックス製作戦／時限爆弾カウント・ダウン／ゴールド・フィンガーの死

オリジナル・サウンドトラック盤
ジョン・バリー楽団
（歌）シャーリー・バッシュ
■SR-654/¥2,300



007 Golden Prize

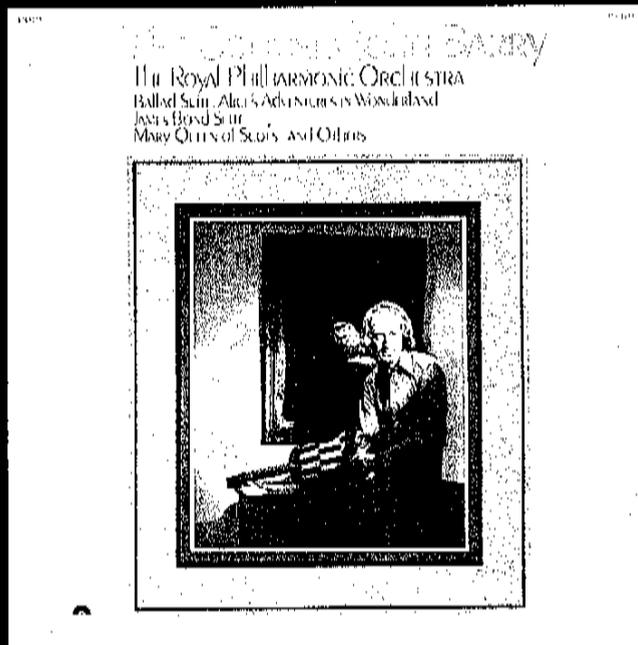
愛はすべてを越えて（「女王陛下の007」より）／ゴールド・フィンガー（「007はゴールドフィンガー」より）／ジェームズ・ボンドのテーマ（「007は殺しの番号」より）／フィオナの死（「007—サンダーボルト作戦」より）／マンゴの木の下で（「007は殺しの番号」より）／レイ・ラダンス（「007—危機一髪」より）／007は二度死ぬ（「007は二度死ぬ」より）／ロシアより愛をこめて（「007—危機一髪」より）／サンダーボルト作戦（「007—サンダーボルト作戦」より）／結婚式（「007は二度死ぬ」より）／女王陛下の007（「女王陛下の007」より）／他

オリジナル・サウンドトラック盤
ジョン・バリー楽団／モンティ・ノーマン楽団
（歌）ルイ・アームストロング
■GP-21/¥2,500

007

シリーズ、 野生のエルザなどの傑作を次々と生み出した “鬼才!ジョン・バリー”

彼は数々の007作品やアカデミー作品の「野生のエルザ」などで大変有名なイギリスの作曲家兼指揮者です。
このLPは上記の様に「007」「野生のエルザ」「真夜中のカーボーイ」など彼のベスト作品を中心に構成されています。

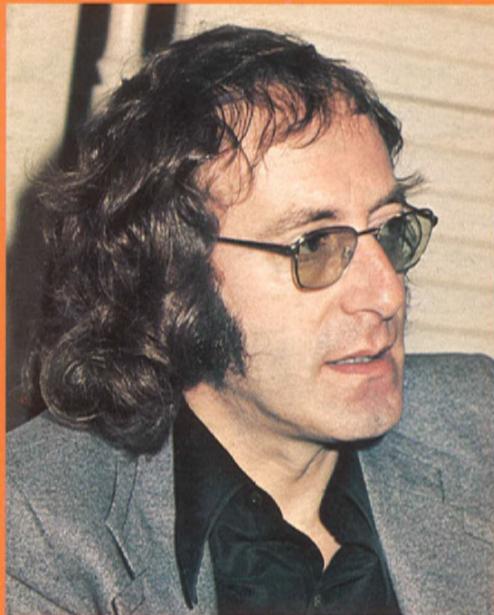


ベスト・オブ・ ジョン・バリー

- ジェームズ・ボンド・テーマ集
ゴールドフィンガー
(007 ゴールドフィンガー)
ジェームズ・ボンドのテーマ
(007は殺しの番号)
ロシアより愛をこめて
(007/危機一発)
サンダーボール
(007/サンダーボール作戦)
ボンドの007テーマ
(007は殺しの番号)
007は二度死ぬ
(007は二度死ぬ)
女王陛下の007
(女王陛下の007)
ダイヤモンドは永遠に
(007/ダイヤモンドは永遠に)
- 野性のエルザ
- 不思議な国のアリス集
a)不思議な国のアリス
b)ファーン・ピフォア
c)アイ・ネヴァー・ニュー
- 真夜中のカーボーイ
(真夜中のカーボーイ)
- クイン・メリーのテーマ
(愛と悲しみの生涯)
- アドヴェンチャー

12月21日発売
好評発売中!!

ジョン・バリー指揮
ロイヤル・ハーモニック・オーケストラ
MP-2433 ¥2,300



min-on